



飼料用米を食べた鶏の産みだての卵

# 『さくら米たまご』登場 みんなで応援したい！

これまで、多くの組合員みなさんにご利用いただいていた「生協さくらたまご」は、2012年1月から『さくら米たまご』として再デビューします。  
『さくら米たまご』とはどんな卵なのでしょうか。ご紹介します。

## 飼料用米がはたす役割

### 食糧自給率の向上につながる

現在、日本の畜産の工サはほとんどが外国からの輸入に頼っています。たとえば、鶏卵の自給率は96%（21年度）とされていますが、そこから飼料自給率を考慮すると10%にまで下がってしまいます。飼料のほとんどが輸入に頼っているということです。飼料用米は、自給率の向上にもつながります。

### 休耕田を活かす

高齢化や過疎化、また日本人の食生活の変化でお米の消費量が減ったことにより、日本の耕作放棄地の面積は年々増えています。岐阜県でも水田の4割が休耕田となっており、

放っておけば耕作放棄地となるでしょう。耕作放棄地が増えれば、病害虫が発生したり、雑草が茂ってゴミの無断放棄が発生するなど、生活環境にも悪影響が及ぶことが考えられます。この休耕田を活用することで、そのような事態を防ぐのと同時に、日本特有の田園風景や生態系が保たれ、水田に水が蓄えられることで、間接的に利水、治水、砂防ダムの役割も果たすことができるのです。

### 岐阜県内で資源が循環する

主に養老町、郡上市で作られた飼料用米を、高山市の大前ファームさんの鶏が食べます。鶏のたまごが、『さくら米たまご』として、コープぎふの組合員さんに届きます。また鶏の鶏糞は、大前ファームさんの畑で



中濃支所の組合員さんが飼料用米の産地(郡上市)で生産者と交流しました。



## 養鶏農家の挑戦『さくら米たまご』 — 大前ファーム —

### 高地で挑んだ養鶏業

大前さんが高山市滝町で養鶏を始めたのは25年前。

「鶏が良い卵を産むためのポイントは『エサ』と、当初から鶏のライフステージや季節にあわせ、最善のエサを自家配合することを大切にしてきました。」

### 飼料用米配合への道

飼料用米の配合を導入するために、専門機関での調査はもろろん、自ら毎日出る鶏糞を洗浄し、モミの消化率を測定。卵の産み具合や、卵の食味の変化などを調査し、米の配合率を決めました。

### 農家と共に取り組んだ米づくり

「米の品質が安定しないと、エサとして使うことは難しい」と、農家といっしょに品質安定にとりくみ、4年がかりで軌道に。より収穫効率の良い飼料用米を生産・確保するため、主に岐阜県屈指の穀倉地帯である、養老町や、郡上市の休耕田を利用し、お米づくりを広げました。



自然豊かな環境にある大前ファームの養鶏場



「養鶏が好きなんです」と卵を手に大前さん



倉庫に高く積まれた飼料用米はすべてお米です



エサに配合する飼料用米「クサノホシ」



親子で養鶏に携わる大前利一さんと真美子さん

大前ファームの7万5千羽の鶏とひよこたちが、1日に消費する飼料は10t。「そのうち1.5tが飼料用米です」と大前さん。1.5tの飼料用米は田んぼ3反約900坪分。『さくら米たまご』を利用することは豊かな水田を守り、耕作放棄地をつくらないことにつながっています。

「いずれはもっともっと多くの畜産業に飼料用米を利用してもらいたいですね」「卵も米も、日本人の舌や、風土にあったものをつくるのが大事だと思っています」と大前さん。「まだまだ試行錯誤。稲作農家の方とも対話をして、これからもずっと『さくら米たまご』をつくり続けていくことが重要です」と娘の真美子さん。耕畜連携のひとつとして鶏糞を肥料としたトマト栽培にも取り組んでいます。

「地域に密着し、循環できる養鶏業を」。卵づくりにとどまらず、農業や流通の連携の可能性など、大前ファームの挑戦はこれからも続きます。

飼料用米の入ったエサもよく食べます。